

2015 年度春期

# 計算機数学 (情報理工学科)

(担当：角皆)

## 本講義の概要

「計算」を対象とする数学

- 「計算」の定式化
- 「計算」の実現
- 「計算」の量と質

→ 「**計算する**」とは？

「計算する」とは？

「計算」

||

計算機で行なえること

では、計算機では何を行なっているのか？

# 計算機

- アナログ計算機
  - ★ 物理量
  - ★ 図式計算（計算図表・ノモグラム）
  - ★ 計算尺
- デジタル計算機
  - ★ 機械式
    - \* 算盤
    - \* 手回し計算機
  - ★ 電子式
    - \* プログラム機構方式
    - \* プログラム入力方式
    - \* プログラム内蔵方式（von Neumann方式）
- 量子計算機

## 本講義の概要（予定）

- 「計算」の定式化
  - ★ 計算機のモデル化  
有限オートマトン・Turing 機械など
  - ★ 計算機の扱う言語・文法  
正規表現・生成文法・文脈自由言語など
  - ★ 計算可能性の理論  
普遍 Turing 機械と対角線論法

## 本講義の概要（予定）

- 「計算」の量と質
    - ★ 計算量の理論
      - 多項式時間・“P vs NP” 問題など
    - ★ 幾つかの数理アルゴリズム
      - \* Euclid の互除法
      - \* 素数判定・素因数分解
      - \* 並べ替え
      - \* 高速 Fourier 変換
- など

## 計算の理論

計算機に於ける「計算」の各ステップ  
(= 命令の実行) は、

計算機内の記憶素子 (メモリ) の  
現在の値 (状態) に従って、

その値を変更 (書込) すること

## 計算の理論

プログラム内蔵方式（von Neumann 型）では、プログラム・データを区別なくメモリ上に置くが、プログラムとデータとは、やはり本質的に違う

- プログラム：一つの問題では固定
- データ：可変な入力



どんな（有効な）データ（入力）が来ても、  
所定の出力を返すことが要請される

## 計算の理論

或る問題の「計算が可能」



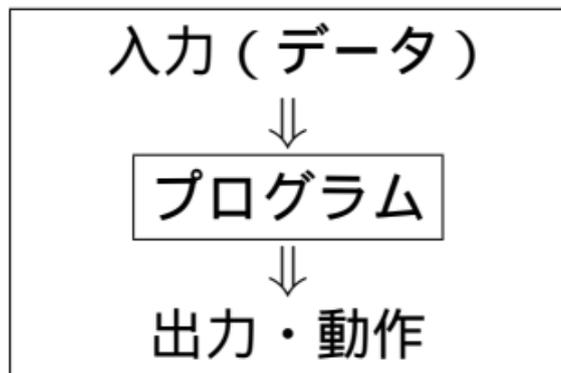
その計算を行なうプログラムが存在



計算機の機能 (= 「計算」のモデル) を決めて議論

→ 代表的な「計算のモデル」を幾つか紹介

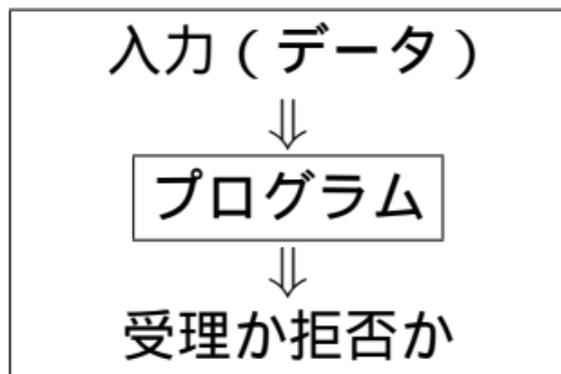
## 問題を「計算する」とは



原理・理論を考える際には、  
出力は最も単純に「0 か 1 か」とする

- 0 : 拒否 (**reject**)
- 1 : 受理 (**accept**)

## 「問題」とは



解くべき「問題」：入力を受理する条件

## 「問題」の例

入力の範囲：文字  $a, b$  から成る文字列

「問題」：入力を受理する条件

- $a$  と  $b$  との個数が同じ
- $a$  が幾つか続いた後に  $b$  が幾つか続いたもの
- $a$  で始まり  $a, b$  が交互に並んで  $b$  で終わる
- 同じ文字列 2 回の繰返しから成る
- 回文 (palindrome)

などなど

## 「問題」とは

それぞれの「問題」に対し、  
定められた計算モデルで、  
受理 / 拒否判定が可能（問題が解ける）か？

受理される文字列が  
「文法に適っている」文字列だと思えば、

「問題」とは「文法（言語）」である

「文法に適っている」かどうかの判定  
… 「構文解析 (syntactic analysis)」

## 代表的な計算モデル

- 有限オートマトン（有限状態機械）
- プッシュダウンオートマトン
- チューリングマシン                      など



## 万能チューリングマシン

プログラム内蔵方式 ( von Neumann 型 )

… プログラムもデータとして保持

→ 一つの機械で様々な計算を柔軟に実現

同様の働きをするチューリングマシンが存在

… 万能チューリングマシン

( universal Turing machine )

全てのチューリングマシンの動作を模倣する

## 計算可能性の理論

チューリングマシンは、  
どんな問題（言語）でも計算できるのか？

「計算できる」とは？

- **認識**する：  
正しければ受理（そうでなければ受理しない）
- **判定**する：  
正しければ受理、そうでなければ拒否
  
- 認識不可能な問題が存在する!!
- （認識可能だが）判定不可能な問題が存在する!!

## 計算量の理論

問題の難しさを如何に計るか？

→ (計算モデルを固定して)

解くのに掛かる資源の分量で計る

… 計算量 (**complexity**)

- 時間計算量：計算に掛かるステップ数 (手間)
- 空間計算量：計算に必要なメモリ量 (場所)

## 計算量の理論

計算量はアルゴリズム（計算方法）によって変わる  
… アルゴリズムの計算量  
→ アルゴリズムの効率 の評価

問題の計算量：

その問題を解くアルゴリズムの計算量の下限

最も効率良く解くと、どれ位で解けるか

= どうしてもどれ位必要か

= どれ位難しい問題か

→ 問題そのものの難しさ の評価

## 計算量の理論

入力データが大きくなれば計算量も増える

→ 入力データ長に対する増加のオーダーで表す  
(Landau の O-記号)

多項式時間  $P \dots \exists k : O(n^k)$

“事実上計算可能な難しさ”

「しらみつぶし」が入ると

大体  $O(2^n)$  程度以上になる (指数時間 EXP)

“事実上計算不可能”

## 計算量の例

- 加法 :  $O(n)$
- 乗法 :  $O(n^2)$  かと思いきや  $O(n \log n \log \log n)$   
(高速 Fourier 変換 (FFT))
- 互除法 :  $O(n^3)$  (FFT で  $O(n^2 \log n \log \log n)$ )
- 素数判定 : 多項式時間 P
- 素因数分解 : 多項式時間 P かどうか判っていない

## “非決定性” 計算量

あてずっぽうを許して、

うまくいけばどの位で解けるか  
= 答を知って、その検証にどの位かかるか

**非決定性多項式時間 (NP) :**

非決定性の計算モデルで多項式時間で解ける

例 : 素因数分解は **NP**

… 素因数を知っていれば割算するだけ

## 未解決問題 (**P vs NP Problem**)

$$P = NP$$

であるか否か？

“The Millennium Problems”

の 7 つの問題のうちの 1 つ

## 参考 : The Millennium Problems

2000 年に Clay 数学研究所 (CMI) により  
賞金 \$1M が懸けられた 7 つの問題

- Birch and Swinnerton-Dyer 予想
- Hodge 予想
- Navier-Stokes 方程式の解の存在と微分可能性
- P vs NP 予想
- Poincarè 予想 ( Perelman により解決 (2003) )
- Riemann 予想
- Yang-Mills 方程式と質量ギャップ問題